

特別企画：現場を知る

東京都建設局から山形県への被災地派遣

東京都×山形県
化学反応

令和7年
12

建設局は、長年にわたって、被災地派遣として多くの職員を他自治体のサポートに派遣してきました。



令和6年能登半島地震に伴う能登への被災地派遣は記憶に新しいところですが、令和6年7月に山形県で記録的な降水量を観測した大雨による被害からの復旧支援のため、山形県新庄の最上総合支庁にも年単位で職員を派遣しています。

今回は、令和7年4月からこの地で災害復旧に尽力している建設局職員を訪ねて現地に足を運んできました。

最上総合支庁の職員のみなさんの日々のお仕事についてレポートします！

山形県最上総合支庁ってどんなところ？



最上地域の暮らしを支える総合ステーション

山形県には、山形市の本府以外に4つの支庁があり、最上総合支庁は、県北部の最上地域8市町村を管轄する地方機関です。保健福祉、産業振興、建設、企画など多岐にわたる業務を総合的に担っていますが、令和6年の大雨を受け、豪雨災害復旧対策室を設置して、積極的に復旧事業を進めています。

山形県最上総合支庁 建設部 河川砂防課 最上地域豪雨災害復旧対策室

村山 室長



①蔵王温泉

②サッカー応援
(モンテディオ山形)



栗田 室長補佐

- ①最上川船下り
②高校野球応援



奥平 技術専門員



平成4年度入都。平成9年度より建設局、第一建設事務所などを経て、宮城、福島、岩手、山形など精力的に災害派遣勤務

- ①月山山頂、農家レストラン
加茂水族館、JA産直（さくらんぼ東根ポポラ、鶴岡）
②馬術では関東大会3位



 令和6年7月25日からの大雨では多くの地滑りや土砂災害、河川の溢水などがありました。現地に立ってみると、土地の広さを改めて実感し、復旧作業の大変さを身に染みて感じました。



|| 最上地域の災害復旧活動についてお伺いしました



令和6年7月豪雨は、山形県での観測史上最大級の豪雨だったこともあり、この大雨による被害は甚大なものでした。災害査定では、山形県と市町村を合わせて合計968箇所、約416億円もの査定額となっています。山形県では、この災害を受け、全国知事会を通じて他県に応援職員を要請、東京都からは、令和6年度に1名、令和7年度に1名の職員が派遣されました。

|| 災害復旧対策室の役割とは



一日も早く、災害査定と復旧整備をめざす

「これまで山形県は、新潟中越沖地震、東日本大震災、能登半島地震などで新潟、福島、秋田、石川など近県に応援に行くことがあっても、他県に要請することはありませんでした。ただ、今回の豪雨の被害があまりにも多岐にわたったことから、初めて他県に応援要請を行いました。」と村山室長。毎週何十か所も国の査定を受けながら、応急工事の発注、監督業務、さらに本工事の発注を行うには、応援のリソースがなければ成り立たなかったそうです。

ワークシェアで全ての災害復旧に対応

「全員が災害時にやるべき業務のことをわかっている。道路、河川、砂防、ダムと区別なく皆で対応しているのには感動しましたね」と奥平専門員。東京都では、組織が大きいこともあり分業体制となっていますが、山形県職員の皆さんはゼネラリストとして全体を把握しているという印象でした。



2班体制で迅速な対応を

「私は去年、道路を担当していましたが、今年は河川を担っています。室長のリーダーシップで、迅速な判断をしてもらえるので、300以上ある河川の災害箇所も10月末で半数くらいまで工事契約が出来ました。昨年の被災後は、現場を見る災害調査班と、査定設計書などを作成する班の2班体制で動きました。」と栗田室長補佐。当時も村山室長のもと、土砂災害で全面通行止めだった道路も1ヶ月で開通させるなど、驚異的なスピードで復旧を進めています。

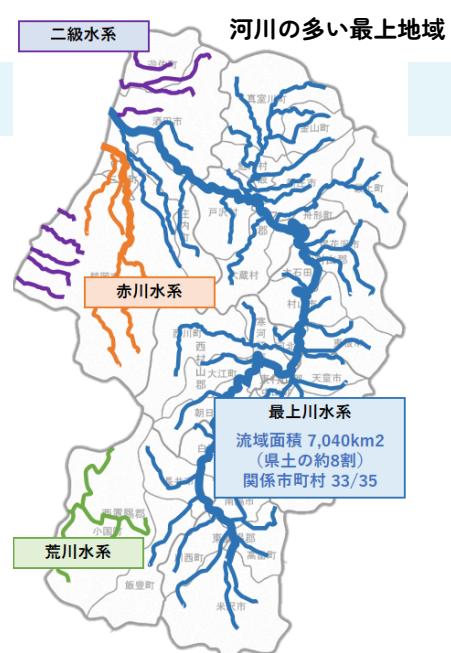


|| 令和6年の大雨被害状況

田園地域ならではの災害対応

最上地域は、すべての河川が最上川に合流します。豪雨による道路、鉄道、家屋被害の多発もさることながら、一大米産地である田んぼが堤防決壊により打撃を受けるなど、都心部とは異なる苦労もある被害状況となっています。最上総合支庁管轄では、河川・砂防関係では301箇所（504）、道路は93箇所（152）が災害復旧箇所として採択され、令和7年10月末時点で約半数が契約済み、工事着手へと進めています。※（）は県全体

そのような中、人的被害は、死者3名、軽傷者4名（県全体）と、被害は出たものの、これほどの災害規模にしては何とかそこまでに抑えることができていました。この秘訣は、日ごろから県と市町村、住民との連携が図られ、避難勧告、避難指示、そして実際の事前の避難が徹底されていたことから垣間見ることができます。



災害復旧対策室で力をいれていること



どうしたら住民の皆さんに喜んでもらえるか

「応援してくれる人がいると頑張れるんです」と栗田室長補佐。900か所近い被害箇所を目の前にして、つらい作業ではないですか?という質問への回答は、意外にも「大変だけど楽しくやっています」という、とても明るい回答でした。

「どんどん国の査定を受けて、設計して発注して工事して...、復旧していく過程を見るとそれが何より嬉しいんです」そう話してくださる対策室のみなさんからは、一人ひとりの県民の方に喜んでもらうことこそがやりがいであるという、真の行政パーソンの誇りを感じました。



住民に寄り添う工夫



復旧工事は県民ファースト

「災害復旧では、被災して家業が進まなくなってしまった農家のひとなど、困っている人に寄り添う復旧を特に大事に考えています。」と村山室長。工事だけを考えると、地理的条件や規模を考えて発注しやすいところから進める、という発想になりますが、優先順位を考える際に、「災害によって困っている人を助けることを第一に工事を決定している」というお話をとても感銘を受けました。

デジタルマップで、誰でも復旧状況を確認できる

今回の災害では、発災直後から、「うちの田んぼ脇の河川はいつから工事してくれる?」というような具体的な場所を指定しての県民からの問い合わせが多かったとのこと。そこで最上総合支庁では、被災箇所が広範囲に点在していることを踏まえ、Googleマップを活用したデジタルマップを作成・公開。支庁から働きかけて、市町村の広報誌や最上総合支庁のサイトで告知することで認知も広がったとのことでした。道路・河川ごとに被災箇所を番号で整理し、進捗状況を地図上で確認できるようにしたことで、市民との情報共有がスムーズになりました。問い合わせ時の場所の認識違いも減少したといいます。こうした取り組みは、災害対応における情報の「見える化」を進める好事例であり、住民とのコミュニケーションの質を高める工夫として、東京都でも参考にできるのではないでしょうか。



令和6年豪雨災害 最上地域復旧工事デジタルマップ
<https://www.pref.yamagata.jp/314071/r6saigaimap.html>

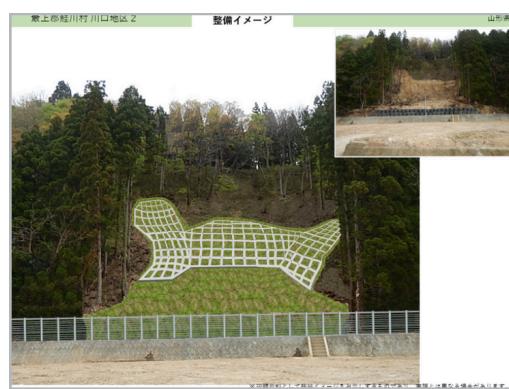


ぜひ一度中身をご覧ください!



住民説明会での工夫が好評

これまでの様々な被災地での経験を通じて、住民の皆さんへの説明において、専門的な資料だけではなくなかなか話が進まない場面もあったことから、奥平さんご自身で、パワーポイントのオートシェイプ機能を活用し、完成後のイメージを図で示す資料を作成されたそうです。その結果、「イメージしやすく分かりやすい」といった声が多く寄せられ、理解してくださる方が増えたとのこと。「住民の方に寄り添った説明を行うには、今ある身近なツールを工夫することでも十分理解を得ることができました。これからも、住民目線を大切にした丁寧な情報提供を心がけていきたいです」と話してくださいました。



PPT 奥平専門員が地元説明会のために手作りで作成したモンタージュ図

令和6年7月の被災状況について

令和6年7月25日、山形県では線状降水帯が2度発生。局地的に1時間80mm以上の猛烈な雨が続き、最上地域では72時間で400mm超の記録的降水を観測。さらに最上川中流の狭窄部（最上峡）によるボトルネック効果で水位が急上昇し、外水氾濫や堤防決壊、斜面崩壊など複合的な要因で甚大な浸水被害が発生しました。

災害要因	説明
線状降水帯の発生	暖湿な空気が梅雨前線に流入し、局地的に激しい雨が長時間継続
地形的狭窄部（最上峡）	複数の支流が一点に集中し、川幅が狭まる地形で水位が急上昇
堤防の決壊	支川での堤防決壊により住宅地や交通網に被害
土砂災害（斜面崩壊・土石流）	丘陵地や谷頭部で表層崩壊が多発し、集落に土石流が流入



小杉地区の地滑り現場

長さ300m、幅100mにも及ぶ広大な場所での地滑り。地学の専門家と相談しながら、すべりを抑制する対策工法を決めているそうです。



新田川の決壊箇所

(写真は令和7年7月時点)

堤防の決壊で田畠にも大きな被害が出ました。通常は雨量が少なく河床が低下する冬に河川工事が行われるそうですが、被災箇所の早期回復を図るために、現在も工事が続いていました。



小杉地区的復旧工事は奥平専門員が主担当。特別な地質のため、専門家の調査に基づいて、工事を進めておられました。



実際に現場を歩いてみると、雨が降っていなくても山から染み出る水でぬかるみ、簡単に沈み込んでしまいます。工事の難しさを感じる現場でした。



急傾斜地の土砂災害も多数。すぐ下に民家があるので、移転や避難生活者も多いとのことでした。

災害に備える住民意識の高め方

地区長の一声が住民の命を守った～信頼と連携の力～

豪雨の際、地区長の一声で避難を決断し、家屋の倒壊による危険を免れた住民が多数いました。日頃から地区長とのコミュニケーションや信頼関係が築かれていたからこそ、「この人の言うことなら聞こう」と思える、地区長の判断力と人柄が、住民の行動に大きく影響した場面でした。現地では、「空振りでもいいから避難する」その備えの気持ちが徹底されているそうです。当時の避難勧告、避難指示、避難した時間を検証すると、今回何らかの被災をした家屋居住者全員が、災害が起きる前に、指定された公民館などに避難していたことがわかったそうです。それが命を守ることにつながっていたのです。日頃からの信頼づくりと関係機関との連携強化が住民の安全につながる大切な要素であるならば、大都市東京こそ、いかに住民の意識を災害対策に向け、いざという時の行動につなげるかという課題に向き合う必要があるかもしれません。



インタビューを終えてひとこと



村山室長

ファイターズガールとともに
エスコンフィールドにて



栗田室長補佐

ご家族とともに



奥平専門員

きてけろくんとともに

今回は、ありがとうございました。

東京都の皆様から首都ならではのお話をさまざまな角度から聞くことができたのが非常に良かったです。自治体同士の横連携の大切さを改めて感じました。最後に冬の山形はスキーや温泉、美味しいお酒など良い所が沢山ありますので是非お越しください。

復旧工事の発注に向けてがむしゃらに走り続けてきましたが、今回東京都の皆さんとお話をすることができ、あらためて振り返るよい機会となりました。山形は四季折々の美味しいものがたくさんありますので、復旧が終わった最上を見に、ぜひまたお越しください。

山形は自然体。お人良しというか、アピール下手というか。最上地域各所で被災するも一般人命被害は皆無、なぜそんなことができたのか。苦労あっても悲壮感がない。皆ひょうひょうとこなしている。そこが山形らしさ。それも山形の魅力。そんな人と風土に乾杯。

山形県新庄市のおすすめスポット

新庄開府400年



新庄市誕生400年記念

初代藩主・戸沢政盛公が1625年（寛永2年）に新庄城を築いたことが起点。

トロトロに似ていると話題に



小杉の大杉

地元では「夫婦杉」「縁結びの木」「子宝の木」とも呼ばれ、パワースポットとして親しまれています。

山形ラーメン界を代表する名店



新旬屋本店

素材へのこだわりと独自の営業スタイルで全国的にも高い評価。

最上川沿いで、韓国に出会う



「道の駅とざわ」モモカミの里 高麗館

地滑り復旧後の跡地を利用して県と国土交通省の連携で、国際交流と地域振興の目的として建設された。店内は韓国ながらの品ぞろえ。

新庄といえばとりもつラーメン



一茶庵 支店

地元のソウルフード「とりもつラーメン」の元祖として知られる老舗ラーメン店

米どころ山形県の日本酒紹介



朝日鷹



ばくれん



裏・雅山流



花羽陽花の枝

十四代で名高い高木酒造

辛口の極みを追求したお酒

季節限定の裏本醸造

創業1593年県内最古の酒蔵。

山形県産のお米



つや姫

山形県産「つや姫」は、炊き上がりの美しい艶と上品な甘みが魅力の高級米です。冷めても美味しく、食感も良いため、お弁当やおにぎりにも最適です。品質管理が厳しく、特別栽培米として安心して味わえます。

#山形つや姫玄米茶



#鳥海山の朝方の風景



#新庄駅付近の夜の風景



#月山の夕方の風景

秋の山形、霧に包まれる幻想

山形は四方を山に囲まれた盆地。秋が深まると、朝晩の冷え込みと日中の暖かさが生み出す霧が町を包み込みます。まるで雲の中にいるような幻想的な風景が広がり、日常が一瞬、異世界に変わるような感覚を味わえます。

